

歴史が物語の中に出会うとき―「プレイバック・シアター」 追憶南京 2011：国際検討会に運用された思考

鄭春暉
同声同戲劇団代表

「プレイバック・シアター」は1975年にアメリカのニューヨークで心理療法家ジョナサン・フォックスとジョ・サラスによって創られたものである。俳優には台本がなく、ただその場で観客から聞いた物語を演劇、体の動き、音楽などの形で即興で演じることで、観客へフィードバックする。

「南京を思いおこす」検討会シリーズは、2007年の学術会議を経て、2009年からサイコドラマとドラマセラピーを加え、2011年に「プレイバック・シアター」の形で、表現性芸術治療法の一つとなった。同声同戲劇団は中国団体の代表として誘われ光栄な限りである。日本の劇団プレイバックーズとともに、検討会で一緒に演出し、この過程を探索しながら、「プレイバック・シアター」の強い結集パワーを感じ取った。

Armand Volkas氏による「HWH」の六つのステップは以下となる：

1. 話し合い、「お互いに交流できないタブーを打破」する
2. 他人の物語に耳を傾け、人間として相手を理解する
3. 誰でも加害者である潜在的可能性を意識する
4. われわれの過去に対して心の底から哀悼する
5. 儀式と芸術作品で哀悼する
6. ワークショップの成果を公開パフォーマンスやイベントを通じて、社会奉仕の形式で更なる人に受け入れてもらう。

プレイバック・シアターは第1、2と6のステップにおいて積極的かつ重要な役割を果たしている。

(1) 主題報告の演出：参加者の歴史による心の傷を整理し直面することを応援する

学術会議の主題報告は学術性に傾く傾向がある。理性的なデータと資料の発表がほとんどである。しかし、今回の検討会は「一人ひとりのこころと体験を通じて歴史を知る」というテーマなので非常に感性豊かである。

Armand氏は主題報告のすべての章末に、「プレイバック・シアター」の手法を用いて、巧みに理性的な資料に隠された感情と歴史をビジュアルに再現させた。参加者の主題報告の内容を深く理解させ、主観感情と理性的な資料を結合させた。それと同時に「プレイバック・シアター」手法についての理解に役立った。

開幕式では参加者がこのプレイバックシアターにどう参加すればいいかを理解させ、円滑に進めるように準備をした。

(2) 練習中の模範：参加者が練習に参加し溶け込めるように援助する

ワークショップは主にサイコドラマとドラマセラピーの二つの芸術性表現治療法を用いて、参加者の演劇に参加することを求め、その場で創作する。「プレイバック・シアター」の俳優が加わることによって、参加者の防衛心理を和らげ、自然に溶け込むことができた。

(3) 物語の解釈：物語を語り合い、同感を求め、お互いに理解できるように促進する

日本人は海外で日中戦争についての大集会で中国人が訴える声に対して驚いたこともあっただろう。日本の若者は自分たちの慈悲深い祖先が日中戦争で行った暴行を知って心を痛めただろう。また中国の若者は頑張って日中友好の掛け橋になろうとするとときに複雑な心境を抱いている。

日中双方の若者はこの重い歴史に関してそれぞれの教育を受けてきたが、自分たちの記憶の気持ちは簡単に触れ合えるものではなかった。しかし、「プレイバック・シアター」によって、安心できる環境ですんなりと表現された。

これらの物語が表現されたときに、日中の参加者はそれぞれの立場から家庭や社会が受けた戦争による影響と傷を理解したうえで、お互いにどういう難局に直面してきたかについて深く理解することができた。物語の中の自然な対話は、シェアすることによって深まり、さらに日中関係の正常化の奥深いとこ

ろまで探り、お互いの努力を通じて明るい未来へ展望していく。

こうした物語を演出することにより、戦争は如何に世代を越えて影響を及ぼしているか、潜在意識にある羞恥と憎しみが今の我々を困らせているかがわかった。物語を聞かされ、知らされ、戦争を経験してきた双方の傷は癒される可能性がある。

(4) 公開パフォーマンス：ワークショップの成果を広げる

ワークショップが始まってから三日目の夜に、南京市民に日本の団体と一緒に二時間の公演を行った。中には南京のYMCAの主要担当者、各大学のボランティア系の先生たちもいた。

演出時、観衆たちは日中平和への期待と無力を感じたところを交流することで、内心の固い気持ちを和らげ、深く考えさせられた。

「プレイバック・シアター」は問題解決には至らないが、演劇を通じて、違う価値観を持つ日中の人々の共感を求め、分かち合うことを可能にした。

今回は Armand 氏の指導の下、日中参加者が努力した成果をシェアし、平和の種をまいた。

今回の演出は同声同戯劇団と日本の Playback-AZ の共同演出だった。双方にとって非常に楽しく有意義だった。異なる文化、異なる言葉を持つ団体が何回もの練習を経て息が合うところを見つけた。日中の文化が違っても、和解と友好の希望が見えてきた。アメリカの Living Arts Theater の Armand 氏、日本の劇団 Playback-AZ と協力した経験は同声同戯劇団にとって非常に貴重な経験である。今後とも日中平和を目指して、微力ながらも貢献したいと思う。